

『治したくない』（本書から抜粋）

▼力や能力のある人が、あるいは人々の集団が、偉業を成しとげ光り輝くというようなことは私たちの社会のどこにでも起きている。(…)そうではない、まったく違うことが浦河では起きている。(…)(力のある人が)あるはずの力を出さない、能力を発揮しない。そうすることでみんなを動かし、場をつくり、空気を満たし、その場や空気がほんとうの意味での力になっていく(162-163 頁) ▼精神科の世界には正解がないということなのだ。正しい答えがあってそこに進めばいいのではないから、悩み迷い、考える。考えながらなお、目の前に起きている事象にいまこの時点での対応をする。常に手探りで、常に不確かで、常に振りまわされている。(165 頁) ▼現場に行っているとき、自分たちが感じること、そこで考えたこと(…)。みんなアート感覚……それが多少失敗であろうが。必ずしもベストでなくても、その感性を大事に行われることについては、うんと価値があるんです。(168 頁)

▼精神障害者が地域を支援するという動きが一筋の流れになろうとしている。それは立派な人がしっかりと進める支援ではなく、いかにもだめで頼りがいのなさそうなメンバーの進める、ちぐはぐ感にあふれた支援だ。けれど、だからこそ地域の片隅にいる人々にたどりつき、彼らの心に火をともし例がぼつぼつと現われはじめていく。(178 頁)

▼早坂潔さん(…)。さんざん入退院をくり返したけれど、七年前に退院してから早坂さんは再入院していない。(…)。暗中模索のころ、早坂さんの顔を見ながらふっと、ことばが川村先生の口をついた。「半分直したから、あとの半分はみんなに治してもらえ」。(…)。早坂潔さんは、薬だけでよくなったわけでも、先生ひとりのおかげでよくなったわけでもなかった。たくさん仲間がいて、薬も入院の経験も、苦労もことばも何もかもぜんぶひっくるめたところで、いまのようにしあわせになった。(180-192 頁)

▼仲間、友だち、当事者グループ。それはまず、AA(アルコールリクス・アノニマス)などと呼ばれるアルコール依存症の人びとの集まりだった。人々は、そこで、仲間の力を借りて回復への道をたどる。もちろん治るといっても、本人は厳しい道筋をたどらなければならないし、治ってもむかしの自分にもどれるわけではない。けれど医者が出番を減らし、当事者という存在が大きくなったとき、はじめて道は開ける。(194 頁) ▼「僕は失敗する人たちをよく、しっかり見ていた。「いい失敗だったんじゃないの」って。(…)。失敗したときは最大のチャンスが訪れたと」。(…)。なぜ失敗し、なぜ自分にはできないのかと悩みなげくとき、そしてまたその悩みを仲間とともに語るとき、そこには再生への契機がある。問題も失敗もないところで、人はどうして考え、悩む力を身に付けられるだろうか。病の深さを知ることができるだろうか。(…)。ところが、いまの医療は、患者を守り、いたわることばかり考え、問題からも失敗からも遠ざけようとする。それは患者思うからではなく、医療者が自分たちを守るためではないのか。アルコールに限らず、ほかのどんな精神疾患の場合でも。(…)。「だから飲ませない、失敗させない、迷惑かけさせない、なんでもコントロールですよ。これが“医療の病気”だってことをぼくはずっといつづけてきてるんです。医療者はコントロール欲求がありすぎて病気です。」(195-196 頁) ▼川村先生がアルコール依存症者から学んだとき、先生は開かれていた。当事者を中心にしなければと考えたとき、当事者に対して開かれていた。(…)。あらかじめ用意された規範や基準をあてはめ、判定を下し批判するのではなく、そこに何があるんだろうとのぞきこむ、そういう形で開かれているのである。(…)。開かれているということは(…)ときには自分を捨てる用意があるということだろう。(…)。相手が閉じていてもまず自分を開く。(200 頁) ▼教科書もマニュアルもなく、何が正しいか間違っているかの判定基準もなく、もしかしたら理念や思想のようなものすらもないところで、人との間に原初のかかわりをつくりだそうとして自ら

を開き、そこで何事かが起きるのわずかな期待とともに待ち受ける。そのような感覚が「浦川の」の根底にはあると思う。(…)。そこにはいっさいの基準も規範も、理念すらないのか
といえ、そうではない。(…)精神障害はすべてを超えたところで、人と人のかかわりの再構築を求めている。その求めに対し浦河の人びとは自らを開くことで対処しようとしてきた。(201 頁)